

コメント2

山本 博之
京都大学



私からは、JAMSのルックイースト政策に関するこれまでの議論や今日のシンポジウムでの発表をうかがって考えたことを、時間の限り二点か三点お話ししたいと思います。はじめに2つのことをお断りしておきます。私のコメントは社会・文化面が中心となって

経済的な話ではないこと、そして、必ずしも日系企業の儲けや1人1人のマレーシア人の儲けに繋がる話にならないかもしれないことです。

■ マレーシアのQCが世界から信用を得た 結果としてのハラル認証

さて、山本課長から出された、世界にない技術をマレーシアが生み出す土台をマレーシア自身が作ることへの協力が必要ではないかというご意見は、その通りだと思います。そして、MJIT、日本マレーシア国際工科院はそのためのよい制度だと思います。

その際に、工学のようなハードなサイエンスを考えるならばMJITを活用する方向で進めばよいと思いますが、マレーシアに根ざした新しい技術、あるいは創意工夫とっていいかもしれませんが、そちらについても考えるならば、アクマルさんからお話が合ったハラル認証が例えばその1つなのかなと思いました。

アクマルさんは今日はハラル認証そのものについてのお話はあまりなくて、ハラルでどのようにビジネス・チャンスを拡大するかというお話が中心でしたが、ハラル認証について考えてみると、もともとイスラム教に根ざしてはいますが宗教的なものと見るよりもクオリティ・コントロールが重要だという話として見ることもできるし、今では世界の多くの国がマレーシアの制度に学ぼうとしているので、このことをあわせて考えるならば、マレーシアのクオリティ・コントロールが世界から信用されるようになってきたというのがハラル認証の話の肝だと思います。

そのようなマレーシアのクオリティ・コントロールの成果というか象徴がアクマルさんご自身で、それがすべてルックイースト政策のせいだということではできませんが、ルックイースト政策で学んだマレーシア人であるアクマルさんがハラル認証を進めていることには大きな意味があると思います。

■ 両国の事情に通じ、価値観を翻訳して伝えられる 東方政策留学生が通訳に携わる意義

二つ目は、午前中のセッションでも出ていましたが、ルックイースト政策の卒業生がマレーシアの日系企業で十分な働きをしていないのではないかという議論についてです。この問いかけにどう応答するのかを考える必要があると思います。

吉村さんの「日本で学び世界で活躍する」という話とも繋がりますが、ルックイースト政策を日本側から見た場合、恥とか勤労倫理などの日本の価値観を世界にわかりやすく翻訳して伝えてくれることがルックイ

ースト政策の意義と言えるのではないかと思います。

もう少し説明しますと、日本で学んだ元留学生が日本企業で生かされていないと、通訳のような誰でもできる仕事をやらされていて、日系企業を辞めて欧米企業に流れてしまうという話がありましたが、通訳は誰にでもできるわけではありません。私も、マレーシアの大学で教えていたとき、マハティール首相と日本の企業関係者の会議で通訳をしたことがあります。マレー語も英語もまあわかるから通訳ぐらいできると思ったら、全然ダメでした。話されている事情がわからないと文脈がつかめないの、訳せないのです。

言葉ができれば通訳ができるわけではありません。両方の側の事情に通じていて、それぞれにどんな事情があるかを了解して、しかもそこで話されていること分野に通じているからこそ通訳ができるわけです。ルックイースト政策の元留学生が日系企業で通訳ができているというのは、日本とマレーシアの両方の社会の考え方がわかっていて、日本で学んだ価値観や勤労倫理をマレーシアに則して理解できているということです。どう伝えるとマレーシア人にわかるか、どう伝えると日本人にわかるかを考える過程で、日本で身につけたことを自分なりに「翻訳」しているのだらうと思います。だからこそ、欧米企業に行ってもちゃんと働けるということです。

こう言ってしまうと、日本企業の直接の儲けにならないかもしれないし、日本に留学したのに日系企業で働きたいという希望が叶えられないかもしれませんが、ルックイースト政策には身につけたものを利用して世界に伝えていくという意義があるとも言えるかもしれないと思います。ルックイースト政策の意義を考えるとときにはそういった面にも目を向けていいのではないかと思います。

■ カリスマ的指導者の時代ではない 現代のマレーシアをどう捉えるか

三つ目は、ルックイースト政策が始まった30年前と現代との違いをどう考えるかという話です。マレーシアが経済成長しており、中国や他のアジア諸国が政治経済的に台頭しているとか、相対的に日本のプレゼンスが低下しているなどのことが指摘されています。

1つ1つについては繰り返しません、ここで挙げられたのは違う点として、今年10月のアジア政経学会でJAMSの企画で行ったルックイースト政策に関するパネルでの鈴木絢女さんの発表と、昨日のJAMS研究大会の伊賀司さんのお話を聞いて、現在のマレー

シアはカリスマ的指導者が導くという状況ではなく、なってきたと言えるのではないかと考えてみました。

別の言い方をすれば、カリスマ的指導者の動向をウォッチしていればその国の行き先がわかる状況ではなくなってきたということです。もしかしたらマレーシアだけでなく他の国もそうなりつつあって、世界全体がそういう方向に向かっているのかもしれませんが、それについては今日の話の範囲を大きく超えていますので踏み込みません。

それはともかく、カリスマ的指導者が引っ張っていく時代ではなくなった状況でルックイースト政策の意義を考えてはどうかと思いました。これを別の角度から言うと、ルックイースト政策に引っ掛けて言えば、マハティール首相が言ったからやるのではなく、個人がそれぞれ参加しながら意義や工夫を考えていくことの積極的な意義を捕まえるということです。

■ マレーシアの人間関係の工夫を世界に示すには 日本の人文・社会科学系の研究者の力が必要

これを考えるうえで興味深いと思ったのが、今年6月にマレーシアで行われたルックイースト政策のシンポジウムで、JAMSからも若手研究者を含めて数人の報告者がありましたが、特に若手参加者たちの報告内容が「ルックマレーシア」という観点からのものが多かったことがあります。

これはアクマルさんの「マレーシアに学ぶ」という話と重なる部分があると思いますが、ルックイースト政策が始まったときに生まれていかなかったかというぐらいの若い研究者から「ルックマレーシア」という議論が多く出された背景として、周囲に考え方や生活習慣が異なる多様な人たちがいて、互いに何を考えているか外から顔を見ただけではわからない状況で生活する中で、他人とどう付き合えばいいかということが、日本社会でも、特に若い世代の人たちの間でけっこう大きな問題になっているのだらうと思いました。そういう問題意識を持つ人たちがマレーシアを研究する中でマレーシアの人間関係の工夫に学ぶことを思いついたのはとても自然なことだと思います。

これがルックイースト政策とどう結び付くのかについては少し工夫が必要ですが、マレーシア社会の人間関係の工夫を世界に提示することはマレーシアだからこそできることとして意義があることだし、でもマレーシアで生まれ育った人は十分に気付かないかもしれないので、それを見つけ出す上では日本人のマレーシア研究者が重要な役割を担ううと思っています。

ルックイースト政策の今後を考えるにあたり、留学先に人文社会系を加えたり、予備段階の教育でも人文社会系の教育を重視する考えも出ているようです。それ自体には賛成ですが、これは日本の伝統文化を学ぶことではありません。最先端の技術を伝えるだけではなく、相手社会でどの部分が使えるか分析し、それをマレーシアの人と一緒にマレーシアの文脈で組み立てなおすことです。このようなことができるのは人文社会系の専門性だと思いますし、このことは、裏返せば日本の比較優位として挙げられていた調整能力を基礎にした協力とも結びつくかもしれないと思います。

■ ルックイースト政策と地域研究者

——研究と実務を両立するJAMSの可能性

もう一つお話ししたいのは、地域研究と学会の役割です。6月のマレーシアでのシンポジウム、10月の政経学会でのパネル発表、さらに今日のシンポジウムでも、専門調査員や委嘱調査員として在外公館で勤務した経験がある比較的若い研究者が、報告者あるいはフロアからの参加者として活躍しています。この人たちは、マレーシアの言葉はもちろん、歴史や社会や文化をよく了解していて、そのうえで今日の課題に現場の事情に則してどう取り組むかを常に考えてきた人たちで、その意味で地域研究者と呼んでいいと思いますが、ルックイースト政策と地域研究者の連携も、もっと考えてもよいのではないかと思います。

これに関連してお話ししたいのは、川端さんの話でJAMSが出てきた部分です。川端さんは、研究者と実務者との連携を考えるにあたって、「実務に責任を負わない研究者が実現可能性に縛られずに大風呂敷を広げて放言するだけでは困る」と言いましたが、研究者と実務者の専門性を考えたとき、私はむしろ大風呂敷を広げて放言するのが研究者に求められている役割なのかもしれないとも思います。それを実現するのは官公庁や民間企業の実務者の専門性であって、大切なのは違う業種の専門家どうして専門性を同じくしようとするのではなく、それぞれの専門性を自覚した上で互いをどう結び付けるかではないかと思います。

一人のなかに研究マインドと実務マインドを混ぜる楽しさ厳しさもあるでしょうし、一人のなかで混ぜるのではなく全体で混ぜる楽しさ厳しさもあるかと思っています。JAMSとしては、後者の方の、いろいろな専門性を持った人が集まって全体で混ぜて1つのものを作っていく楽しさ厳しさが追究できればいいなと思っています。